

藤田博保・さく 斎藤博之・え

のこされたゴン助さま



大日本の創作どうわ 大日本

NDC. 913

のこされたゴン助さま

藤田博保

大日本図書 1979 (昭54)

126 p. 22cm (A 5)

(大日本の創作どうわ)



大日本の創作どうわ

1979年12月15日

第1刷発行

著者
藤田博保

発行者
佐久間裕三

発行所
大日本図書

画家
斎藤博之

印刷／東洋印刷
製本／岸田製本

東京都中央区銀座
1丁目9番10号
電話・03-561-8671
振替・東京9-219番

のこされたゴン助さま

© 1979 H. Fujita & H. Saito

のこされたゴン助さま

藤田博保・さく
斎藤博之・え





のこされたゴン助さま／もくじ

1 村にやつてきた大男・5

2 鉄の働き・14

3 雨のふる日・28

4 鉄と子どもたち・40

5 まつりの日のできごと・55

6 健のしかえし・75

7 村びとの話しあい・85

8 犬の死・100

9 村をでていった鉄・121

❀この本をかいた人❀

藤田博保（ふじた ひろやす）

1924年青森県生まれ。現在、弘前市立第四中学校教諭。小説「十六才」で家の光協会地上文学賞を受賞。『毎日中学生新聞』に「メントツの生け捕り作戦」、『朝日小学生新聞』に「ばっちゃんからもらった鈴」「ふしぎな目玉の物語」などを連載。おもな著書に、『情っぱりとシャモ』『まぼろしの南部馬』『アシカものがたり』（いずれも講談社）がある。日本児童文芸家協会会員。

現住所：青森県弘前市茂森新町4-3-4

斎藤博之（さいとう ひろゆき）

1919年中国瀋陽生まれ。帝国美術学校卒業。

1971年『しらぬい』（たかしよいち・作 岩崎書店）で第2回講談社出版文化賞（絵本部門）受賞、1972年『か'わっば』（たかしよいち・作 岩崎書店）ほかの一連の絵本で第21回小学館絵画賞受賞。『カヤトとサヤノ』（大石真・文 偕成社）『むささび星』（今西祐行・文 ポプラ社）『鬼がら』（たかしよいち・作 岩崎書店）などの絵本のほか、さし絵に『教室205号』（大石真・作 実業之日本社）『ちゃんめら子平次』（筒井敬介・作 あかね書房）『花咲か』（岩崎京子・作 偕成社）など多数。

現住所：神奈川県鎌倉市笛田1779-12

Ⅰ 村にやってきた大男



和助が子どものころ——それは太平洋戦争が、おわってまもなくのことですが、村でいちばんこわかったのは、鉄とよぶ男でした。

ほんとうは、鉄蔵とか鉄五郎という名まえだったにちがいありません。

が、村ではだれもその名まえでは、よばなかったのです。ほんとうの名まえは、だれもしらなかつたからです。

鉄はよそものでした。

どこからやってきたのか、もともとどんな職業だったのか、そのおいたちも、まったくわかりません。鉄はひとりぼっちでした。

村のはずれに川が流れて、そこに古いつり橋がかかっています。

橋をわたると、岸^{きし}辺の草むらにかこまれた中に、板^いばりの荒^あれはてた小屋がたっています。そこはむかし、川をさかのぼってくる、サケやマスなどをとるために、村の男たちがねとまりした、ヤナ小屋でした。

村にやってきた鉄^{てつ}は、そこをねぐらにしたのです。

鉄^{てつ}はボタンのとれた、すりきれた戦^{せん}争^{そう}中^{ちゆう}の、つめえりの国^{こく}民^{みん}服^{ふく}をきていました。

ズボンはスフ（人^{じん}造^{ぞう}絹^{けん}糸^し）のまじった、だぶだぶの紺^{こん}色^{いろ}でした。肩^{かた}にはもとの軍^{ぐん}隊^{たい}で使^し用^{よう}した、ざつ^うのう（布^ぬ袋^{ぶくろ}）も、さげていました。

うわぎの胸^{むね}に氏^し名^{めい}をかいた、ほそながい布^ぬきれがぬいつけてありました。でもそこに記^{しる}された文字^{もじ}は、うすくなって、ほとんどよみとれなくなっています。

村^{むら}本^{もと}鉄^{てつ}——と記^{しる}された氏^し名^{めい}も、やっとよめるていどでした。が、あとの部^ぶ分^{ぶん}は、ちぎれてわかりません。

古い国^{こく}民^{みん}服^{ふく}に、よれよれのズボンをはいた鉄^{てつ}は、すりへったゴム長をはき、め^めのあらい刺^さしこの、ボト（作^さ業^{ぎょう}衣^い）をきていました。

腰には手あかでよごれた、さやにはいったマキリ（ナイフ）もさげていました。
国民服の上にボトをまとい、マキリをさげたふくそうはちぐはぐで、とても奇妙
なかつこうでした。

鉄は、百八十センチをこす大男でした。

頭の毛は、うすくなっているのに、顔いちめん、ぶしうひげをのぼしていま
す。それに、まのびのした表情で、年齢さえはつきりしません。

鉄はひとりぼっちでしたが、犬を飼っていました。鉄ににて体の大きい、白い毛



なみの犬いぬでした。が、もとはのら犬いぬだったにちがいありません。体からだはいっぱいほこりをかぶってよごれ、いつも鉄てつのあとから、のそりについてくるのです。

和助わすけたちの村は、戸数こすうが百戸ひゃくこあまりの、ちっぽけなむらでした。でもまわりは、山々にかこまれてのどかで、しずかな農村のうそんです。

そこにえたいのしれない大男おおおとこが、犬いぬをつれてあらわれたので、さすがに大さわぎになりました。

ヤナ小屋にすみつくようになってから、鉄てつはきまって朝と夕方、ぶらぶらと村にやってきました。

鉄てつはとても、ぶあいそうでした。村びとがことばをかけても、へんじもせず、顔をあわせても、ぎろりと目玉めだまをむくだけで、ぶすっとおしだまったままでした。

白い犬いぬをつれた、ずうたいの大きな鉄てつが、歩いてくるのを見かけると、子どもたちはこそそとかくれました。

こわかったからです。

「みんな、気をつけろっ。」

「あいつは、マキリをもってるんだからなあ。」

「なにをしでかすか、しれないからな。」

ことばをかけても、へんじもしない鉄てつに、村びとたちもみな、けいかいをしていました。

*

学校がひけて和助わすけが、友だちとかえってきました。小学校がおなじ仁平にへいと友作ともさく、与吉よきちです。

「あつ、鉄てつだっ——。」

家も近くなつてから、与吉よきちがさげびました。なるほど犬いぬをつれた鉄てつが、ゆっくりヤナ小屋のほうに、歩いていくのが見えます。

しかし子どもたちは、もうにげだしたりはしませんでした。見た感じかんはこわいけど、鉄てつにはふしぎに、心をひかれるものがあるからでした。

そばに近づいてから、思いきって和助が、声をかけました。

「鉄っ。」

「鉄ったらっ。」

仁平も友作も大声で、よんでみました。

でもやっぱり、鉄はふりむきません。

「鉄っ、きこえねいのかよっ。」

三度めに子どもたちは、すぐそばまで近よって、声をそろえてさげびたてました。

それでも鉄は、ふりむきませんでした。

へこれは、おかしい？」いくらぶあいそうだって、なんどことばをかけても、ふりむかないなんてふしぎです。

ちよっと子どもたちも、だまりこみました。が、やがて与吉が、いいました。

「鉄はきつと耳が、きこえないんだよ。」

いわれて和助も、あとのふたりもへなるほどと、うなずきました。それ以外は、かんがえられないからです。



でもそのとき、鉄のそばを歩いていた犬が、きゅうにほえたてました。

「うっ——わん、わんっ。」まわりで子どもたちがさわぎたてるので、犬はおどろいたのです。

首の毛をさか立てて、キバをむきだした犬のようすを見て、ようやく鉄も、うしろに人がいるのを察したようでした。

鉄ははじめて、ふりむきました。そしてものもいわずに、ぎろりと子どもたちをにらみつけました。耳のきこえない鉄は、口もきけないからでした。

しかし口はきけなくても、大男の鉄からにらみつけられて、さすがにふるえあがるほど、こわかったのです。

四人はいちもくさんに、にげだしました。

にげ帰ってきた子どもたちは、道ばたの草むらに、へなへなと腰をおろしました。

「やっぱ鉄に近よるのは、あぶないよ……。」

和助が息をはずませながら、いいました。

「そうだ。マキリをもって歩くんだからなあ。」

仁平にへいもいいでした。

「もしかしたら鉄てつは、人殺ひところかもしれないよ……。」

「人殺ひところしだって？」

だしぬけに与吉よきちが、おそろしいことをいいだったので、ほかのものもぎくりとしました。

「人殺ひところしでなかったら、けんかでもして、マキリで人を傷きずつけたんだよ。」

「うん、そうでなかったら、マキリなんかもって歩かないもん——。」

与吉よきちにあいづちをうつように、仁平にへいがいました。

「鉄てつはきつと、おわれてるんだよ。」

「だから、こんな山の村に、にげてきたんだ……。」

それをきいて和助わすけも、なるほどとおもいました。友作ともさくも、うなずきました。

なんとしても、腰こしにマキリをさげているのが、子どもたちには、ぶきみでならなかったのです。

2 鉄てつの働はたらき

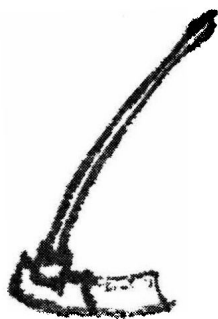
えたいのしれない鉄てつが、すばらしい働はたらきをするときがきました。

それは五月も、なかばすぎのことです。

いそがしい田おこしや、しろかきもおわって、しばらくはのらしごとも、いちだんらくをします。

でも休むまもなく、村では農道のうどうの工事がはじまりました。村はずれの川土手から、たんぼに通ずる道路工どうこう事です。

作業さぎようがはじまって、まもない日の午後——子どもたちは学校から、もどってきました。



川土手までさしかかったとき、和助はおもわず足をとめました。

「あつ、鉄がいるっ。」

和助が作業場にいる、鉄をみつけたのです。

「鉄が、ゴロをひいてるよっ。」

「ほんとだっ——。」

仁平も友作も、目をみはりました。鉄は村びとといっしょに、作業をしています。さっそく子どもたちは、かけていきました。

工事は、道はばをひろくするために、両側に土を盛っていきます。土は川原までおりて、そこからソデとよぶ木の箱にいれ、背おってはこびます。はこんだ土をスコップでならし、それを固めるのがゴロひきでした。

ゴロは長さが一メートル、直径が五十センチほどの、コンクリートでつくったローラーです。

ゴロは、ひきづなをつけて、おとなふたりがかりで、やっとうごくものでした。「うわあ、鉄がひとりでひいてるぞっ。」